

2022年6月13日第82回運輸政策セミナー

「データ社会における気象データの可能性」

～安全・安心を高め、ビジネス・生活を変革する気象データ～

宿利会長 開会挨拶

皆様、こんにちは。運輸総合研究所 会長の宿利正史です。

本日も、ご多用の中、大変多くの皆様にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

近年、情報通信技術の進展に伴い、社会・経済活動の様々な分野で多くのデータが集積され、活用されるようになってきました。

気象の分野では、観測技術や予測精度の向上に伴い、データの高度化・大容量化が進み、気象データを社会・経済活動のデータと関連づけて総合的に分析することにより、防災においてのみならず、幅広い産業分野や人々の生活において、新たな価値を生み出す取り組みが進められています。

このように気象データが幅広い分野において活用されるようになった背景について、ここで少し過去を振り返ってみたいと思います。

今から30年ほど前の平成5年（1993年）、気象の分野では、「予報の自由化」といわれる大きな制度改革がありました。気象庁の有する大量の気象データを民間に提供するための体制を確立し、その気象データを民間において活用する技術者として気象予報士の資格を創設したことで、民間の気象会社が気象予報を行うことができるようになりました。

余談ですが、この制度改革のための気象業務法の改正を気象庁で担当したのが、当時気象庁企画課長で、後に気象庁長官となられた山本孝二さんほか気象予報の専門家の皆さんと、法律案作成など改革推進のために気象庁に派遣されていた企画課調査官、現在当研究所専務理事の奥田哲也でした。一方、法律案を審査して、閣議決定し国会に提出するための法制的な仕上げを職務とする内閣法制局参事官として担当したのが私でした。気象業務改革を実現するための当時の侃侃諤諤の議論を今でもよく憶えています。

この制度改革が民間企業による気象データの活用を促し、企業の創意工夫等とも相まって、現在の多様かつ広範な気象サービスの発展につながりました。

本セミナーでは、このような経緯を背景として、今日の気象データの活用こんにちの最新の状況を通じて、気象データの有する可能性について、皆様と一緒に考えてみたいと思います。

まず、東京大学大学院 情報学環こしづかのぼるの越塚登教授に、「データ社会における気象情報・データの意義と利活用の可能性」について、基調講演こしづかをお願いしております。越塚先生はユビキタスコンピューティングの研究を通じて様々な活動に取り組まれておられます。

続いて、ビジネスや研究の幅広い分野において、気象データの利活用に取り組んでおられる3名の方から、

まず、一般財団法人 日本気象協会つじもとひろふみの辻本浩史様から、
次に、富士通株式会社おおいしゆうすけの大石裕介様から、
最後に、株式会社ルグランいずみひろとの泉浩人様から、
それぞれご講演いただきます。

皆様のご講演の後、越塚先生を進行役として、座談と質疑応答を行い、最後に当研究所の山内所長から全体講評を行います。

気象は、社会・経済活動に直接・間接に大きな影響を及ぼし、また、当研究所の活動の中心であります交通運輸・観光とも深い関わりのある分野です。

本日のセミナーは、この気象の分野について、当研究所として新たに取り組みを進めるものであり、ご参加いただいております多くの皆様にとりまして、真に有益なものとなりますことを期待いたしまして、私の挨拶といたします。

本日はご参加いただきまして誠にありがとうございます。

以上